



Special Interview

江口 裕之

(英語講師・ミュージシャン)

内を見つめることで見える素晴らしい未来
そこに向かって常に挑戦

プロミュージシャンから通訳へ転身。そして英語講師の道へ。CEL英語ソリューションズ最高教育責任者の江口裕之さんは、通訳経験を生かして、日本文化を外国人にどのように伝えるかといった著書も多数手がけている。これまで歩んできた道のりと英語教育への想い、そして、これからの展望についてお話を伺った。

一度きりの人生、 やりたいことをやろう！

長崎県佐世保市で生まれ育った江口さん。佐世保には米軍基地があるためアメリカ文化が街中にあふれており、その影響からか両親は洋楽のレコードを数多く持っていた。そのような環境の中、子どもの頃から自宅にあふれるレコードを聞き、英語に自然に触れてきたのだという。

中学生になり、学校で英語の授業が始まると語彙力がつき、洋楽のレコードを聞くと、小学生の頃とは違い英語の音がどんどん取れるようになった。流れる歌に合わせて、聞こえた通りに真似して歌うことが楽しくなり、バンドを組んだ。中でも、イギリスのロックバンド「キックス」がお気に入り。アルバムの楽曲は耳コピして、バンドで歌った。

中学卒業後は、北九州工業高等専門学校の化学工学科へ進学。文法訳読中心だった中学校での英語の授業とはまったく違い、科学文献を読んだり、ネイティブ教員と会話をしたりといった実用的な英語の授業に、はじめは驚きつつも次第に面白みを感じるようになった。もっとも、小学校の頃から聞いていた洋楽と、中学校で組んだバンド活動のおかげで、英語の音に耳が慣れていたので、英語を話すことへの抵抗はまったくなかった。

そうして5年間を過ごすうち、卒業を間近に控え、進路選択が迫ったそのとき、山口県岩国市の米軍基地で、カントリーバンドのメンバー募集があることを知った。魅力的な話だった。一般企業へ就職するか、それとも中学の頃からのめり込んでいるバンド活動を続けるか。悩んだ。だが、決めた。「一度きりの人生、やりたいことをやろう!」と。選んだのは、やはり「バンド活動を続ける」という道だった。

英語ができるかどうかは 死活問題だった

オーディションを受けると、「合格」の知らせが舞い込んだ。いよいよ、住み込みで基地内で演奏活動をする生活が始まった。基地内では、もちろん英語漬けの日々だ。しかも、耳に入ってくるのは教科書英語とは違う、スラングや口語表現ばかり。日常的に交わす挨拶も、「How are you?」ではなく、「What's up?」や「How's it going?」だ。

「『コミュニケーションの英語って教科書とは違うのか…』と、

実生活で英語を使うようになり、その違いを肌で感じるようになりました。僕たちのバンドには、マネージャーとして退役軍人がついていて、アメリカの最新のヒットチャートを教えてくれるのですが、彼とのコミュニケーションには、言葉が通じなくても「音楽」という共通のふれあいがあり、お互いを理解していました。その当時、英語は体得するものなのだと感じていたのを覚えています」。しかしながら、基地内での演奏活動には、英語ができるかどうかは、死活問題。クラブに来るのはすべて、日本語を理解しない外国人。だとすれば、英語で話をしなければ伝わらない。英語力がなければ、ウケもしないという厳しさがあった。「僕たちは必死で英語の勉強をしました」

英語と格闘しながら4年間の米軍基地での活動を経て、江口さんたちのバンドは東京へ進出。ライブハウスやミュージカルショーなどでの演奏活動を始めた。そして、そこでも英語力の必要性に迫られたのだった。

ライブハウスでの演奏には、客とのコミュニケーションが不可欠だ。演奏だけをすればよいのではなく、曲と曲をつなぐMC(おしゃべり)があるのだ。英語の曲の解説や曲に込められた想いなどを、言葉で伝えたい。英語の歌を歌っていても、日本人のお客さんであれば、MCは当然、日本語。楽なはずだ。しかし、その歌詞の中に込められた想いの文を伝えようとしたとき、基地で演奏していた頃には気にすることのなかった英語の歌詞に込められた意味を考えるようになった。

そして演奏する楽曲を通じて、英語と日本語の表現の違いも感じるようになった。歌詞で使われる英語は、教科書的な英語とは違い、倒置や省略が多く、慣用句やスラングも多いが、その反面、韻や文法の規則は厳しく、その知識があれば理解しやすい。

「特にカントリーソングの歌詞の理解には、アメリカの歴史や地理、文化的背景の知識が不可欠で、そういった言葉や文化の違いを感じながら歌詞を理解し、その歌詞に込められた思いを日本語で伝える。改めて『もう一度、しっかり英語を学んでみよう』という気持ちが高まってきました」

英検 1 級合格が切り拓いた 新たな道

英語は体得するものでありながら、語学として学ぶもの、という2つの局面から英語を見つめるようになった江口さんは、日本で英語力の最高レベルにあたる英検 1 級を取得しようと奮起。勉

内を見つめることで見える素晴らしい未来 そこに向かって常に挑戦



強を始める。

1985年、初めて受験した英検1級の試験は不合格。生まれて初めての「不合格」という屈辱を味わったおかげで、さらに意欲が高まった。

何事にも徹底的に取り組む江口さん。演奏活動と英語学習の両立は難しかった。20歳の頃、進路に悩んだときと同じように再び岐路に立った。ちょうどその頃、熊本でカントリー音楽の大御所、チャーリー永谷さんのバックバンドとして演奏する機会を得られたこともあり、導かれるように東京から熊本に居を移し、本腰を入れて英語の勉強に歩みを進めた。そして1986年、猛勉強の末に、第2回英語検定試験1級に再挑戦。合格を果たしたばかりか、成績優秀者として表彰された。また、学習に利用した社会通信講座でも、文部大臣奨励賞を受賞した。

1級に合格すると、江口さんにはたちまち通訳の仕事が舞い込んできた。先端技術の発展による産業育成と住民の快適な暮らしの実現を目指して整備された、熊本県のテクノリサーチパークへの外国人来訪者に対する通訳の仕事だった。化学を学んできた江口さんにとっては、バイオテクノロジーや医療といった興味ある分野の知識を生かして通訳ができるという、願ってもないチャンスだ。

こうして、昼は通訳、夜は演奏活動という二足のわらじ生活が始まった。当時は日本に「国際化」という言葉が飛び交っていた時代でもあり、徐々に通訳の仕事の比重が高くなっていった。そんなあるとき、熊本市と姉妹都市関係の締結を進める米国テキサス州サンアントニオ市からの市長訪問団の通訳を務めるこ

とになった。江口さんにとっては、その経験こそが、現在の仕事へシフトするターニングポイントになったと言う。

「外国の方とお話する場合、通訳としては、当然、日本の文化や歴史にも触れなければならない場面があります。でも当時の私は、文化や歴史についての知識が不足し、通訳をするにも行き詰まりを感じていました。英検1級に合格して、ある程度の英語力は身についたと自負していましたが、結局はネイティブの^{りゆうちよう}流暢さを超えることはできません。頭打ちになった感が否めませんでした。そんな挫折感を味わいながら、次の目標を探し始めていました」

次の目標。それは、通訳案内士試験の受験だった。流暢さではネイティブにはかなわない。だが、日本の文化や歴史は、日本で生まれ育った人であればこそ理解できる部分も多く、それを説明することは日本人にしかできないはずだ。そう思い、自身が英語を使う意味を見出し、1988年に通訳案内士試験を受験。結果は、もちろん合格。「日本文化を英語で伝える」という、自らのライフワークを得ることになったのだ。

面白さを伝えれば、 学ぶ意欲が高まる



その後、江口さんは、米軍基地時代や熊本での通訳時代を通して自身が体験し体得したことを胸に、再び東京の地を踏む。予備校講師として、通訳案内士や英検1級を目指す生徒たちへの授業を受け持つことになったからだ。演奏活動で培ったパ

パフォーマンス性を生かした授業は、すぐさま生徒たちを魅了し、たちまち人気講師の地位に上り詰める。その活躍の様子が、出版業界からも注目されるようになり、日本文化を英語で紹介する連載記事の執筆依頼も受けるようになった。

連載にあたっては、日本各地を自分の足で歩き回り、自ら日本文化を体験した。観光業の課題なども探り、「真のおもてなし」のあり方を追求していったと言う。

「たとえば、仏像を英語でどう説明すべきか。通訳とは、ただ英語に訳せばいいのではありません。仏像を目の前にしたときに受ける感動をいかに伝えることができるかが大切なのです。単なる知識の丸暗記では通訳にならないのです。そのためにも、日本文化を好きになり、自分が体感することで、自

分にしか伝えられないことが出てくるはずだと思いました」と江口さんは語る。のちに、その連載記事を読んでいた編集者からその知識を1冊の本にしてはどうかというオファーがあった。それが、2001年にジャパンタイムズ社から発行された『英語で語る日本事情』だ。(編注:2011年に全面改訂され、現在は『新・英語で語る日本事情』となっている。)

同年、本の出版をきっかけに、オンライン英語教育を取り入れ、“本物の英語力”を身につけるための英語教育を提供する「CEL 英語ソリューションズ」を設立した。通訳案内士を目指す人たちを指導する立場となった江口さんは、生徒に向けて「通訳案内士である以前に、日本人であってほしい」と呼びかける。

「日本人として、学習者として、先人たちへの敬意を忘れてほしいと思います。その気持ちなくして、日本の文化や歴史を学ぶことはできません。そして、自分がそれを体感しなければ、その魅力を伝えることはできません」

江口さんは、授業では、まず「面白さ」を伝えることを大切にしているという。面白さを感じることができれば、自ら学ぶ意欲が高まり伸びていくと、自らの経験で知っているからだ。「たとえば、英語の文法指導で分詞構文を教えるにも、単に形を教えるのではなく、なぜこの場面で分詞構文を使うと効果的なのか、という理由を示すことで学習者の興味を引き出し、理解を深めるように指導します。また、形容詞の使い方を例に取っても、『日本語では形容詞は名詞の前に置くのが基本だが、英語では、形容詞は名詞を前から後ろからも修飾できる』、そこから生まれる日本語と英語の発想の違いなどを示すことで英語の面白さを感じてもらえればと思います」と説明する。

英語に触れて日本が見えてきた

指導者は、学ぶことの意義を感じさせ、興味を持たせることで、学習者の学習意欲を引き出すことができる、と江口さんは話す。そして、指導者としても常に向上しながら、教える内容にどんなメッセージを込めるかが大事だと強調する。



内を見つめることで見える素晴らしい未来 そこに向かって常に挑戦

「日本の観光名所を教えるにも、ただ知識だけを授ければよいわけではありません。奈良の大仏も鎌倉の大仏も、どちらも大仏ですが、何が違うのか。その理由を考え、探るだけで興味の幅が広がるでしょう。歴史から発せられるメッセージを指導者自身がいかに受け止め、学習者にどう伝えていくかが大切なのです。例えば、私はもともと化学を専攻していましたので、化学に関する話題を扱うとき、うんちくを意図的に込めて話すことがあります。すると、何人かはそれに反応し、興味の扉を開く鍵となるのです。指導者としてそんな知識…ネタとも言いますが(笑)をいくつも持つこと。学習者との接点を見つめることが求められるのです」

日本文化を英語で伝えることを通じて、江口さんは日本の魅力を再発見している。日本に生まれ育ち、日本について深く知り、長きにわたり受け継がれてきた伝統や先人たちの知恵に触れるほどに、日本が好きになっていく。

「日本人は自然と共に、逆らうことなく生きてきました。何度も大きな震災に遭いながらも、そうした経験を通じて身につけた生きる知恵は、100年経っても、200年経っても、1000年経っても受け継がれています。世界が直面している課題に対して、日本人の持てる知恵を、今こそ後世のために、生かしていくことが必要だと思います。また、世界ではコミュニケーション下手と言われる日本人ですが、日本人は本音と建前をうまく使い分け、人間関係を円滑にする術を身につけています。何事も白黒はっきりさせることがよいとは限りません。むしろ、日本人の持つ文化が、人間関係を円滑に運ばせる場合だってあるのです。『国際人になる』ということは、日本人らしさを失うことではありません。日本人としての価値観を大切にしつつ、海外の人々と心通わせていくことが必要なのです」

英語を通じて、日本への理解がより深まった。自分のライフワークが見つかった。するともっと日本が好きになり、日本人の良

さを見つめることができた。そして、日本人が身につけるべき英語が見えてきた。足掛け5年担当してきた日本文化を英語で伝えることを学ぶ、NHKの語学教養番組「トラッドジャパン」の放送が2012年3月で終了し、江口さんとしては「ひと区切りがついた気持ち」だと言う。そして現在は、再びこれから自分が向かうべき方向を探しているところだと話す。

「通訳案内士や英検を目指す人たちに向けて、自分の想いをいかに伝えていくかを考えています。2013年度からは、山梨県の大学の国文科で授業を受け持つことになりました。英語を専門に学んでいる学生向けではなく、日本文化や文学を学んでいる学生向けです。これまでは、英語に興味のある人に英語を教えてきましたが、そうではないのです」とうれしそうに話す江口さん。これから始まる新しい挑戦への期待感をふくらませている。

「国文科の学生は日本の様々な文化にたくさん触れているのに、それを英語で発信することが苦手なのだそうです。彼らが学んでいることの魅力に気づきを与え、さらに興味を引き出すことができるよう、今から楽しみにしています。『言語』とは、その国の文化の表れです。英語に触れることで、英語の持つ文化的背景も知り、日本の文化に触れることもできます。学んだことが、英語を通じて違った視点で見られるようになることは、大事なことだと思います。その価値に、一人でも多くの人気づいてほしい。そんな想いで教壇に立ちたいと思っています」

日本人が自信を持って、世界中の至るところで、大きな声で英語を使って日本について話すことができるようになる。そんな姿を思い描きながら、さらなる挑戦の場に少年のような目を輝かせる江口さんは、今日も指導に熱が入る。

2013年4・5月号より江口先生の連載「江口裕之の日本のことを伝えよう」が始まります。英語を通して日本のことを再確認できるトリアが満載です。どうぞご期待ください！

江口 裕之 (えぐち ひろゆき)

CEL英語ソリューションズ最高教育責任者。1957年長崎県生まれ。国立北九州高専化学工学科卒業後、プロのミュージシャンとして全国で演奏活動を展開後、通訳・翻訳家に転身。1989年から一貫して通訳案内士の育成に携わる。2001年、東京にCEL英語ソリューションズを設立。2009年よりNHK Eテレ英語教育番組「トラッドジャパン」講師。著書に『新・英語で語る日本事情』(The Japan Times)他多数。音楽CDに「My Good Ol' Songs」(アソルハーモニクス / RADIO DAYS)。



当協会では、英語学習者を支援する通信教育講座を開講しています。

www.eiken.or.jp/learning/

グローバルに活躍する人材を育成 **実践 グローバルビジネス英語講座**

お問い合わせ先 ● 電話：03-3266-6505

英検 通信教育

検索